

【展覧会評】

心と繋がる手仕事とその潜在力

「Folk Crafts 世界の手仕事——館蔵コレクション」より

豊田市民芸館 2020年6月2日～10月18日

国際ファッション専門職大学 廣田 緑

1 手仕事の日本——民藝運動と民藝館

「手仕事」と聞いたとき、我々はどのような仕事を思い浮かべるだろうか。

ニッポン手仕事図鑑オフィスは、日本の職人の技術や文化を継承するだけでなく、その技を広く公開し、新たなビジネスの創生に貢献することを目的に、WEBサイト「ニッポン手仕事図鑑」を運営している。サイトには南部鉄器職人、傘職人、信州打刃物職人といった生活用品から、独楽職人、砂時計職人、線香花火職人のような趣味の工芸、また生姜糖職人、せんべい職人など食に関わる職人らの手仕事が15分ほどの動画で公開されており、青森から熊本まで81人の職人の手仕事を見ることができる¹⁾。

また、日本職人史研究の第一人者、遠藤元男は『ヴィジュアル史料 日本職人史第4巻 職人の現在』[1992]で、在来手工業をおこなう職人に、石工、植木職・造園師、木挽き、左官、大工、鳶職、鋳物師、織物師、鍛冶工、紙漉き、指物師、摺師、染物師、畳師、焼物師、箒師、足袋師、提灯師、鼈甲細工師、桶師などを挙げ、新興手工業として革靴職人、テーラー、ブラシ屋、万年筆職人、洋家具師、洋鋏師、理容師などを紹介している。これら職人が使う道具や素材、手仕事の動作や仕事の過程を写真とともに詳説した上でつぎのように記している。

手仕事は職人仕事のことである。手仕事は道具による一品生産が基本で、全工程

が一人の職人によって完成されるのが原則である。したがって、一人の職人とその一つ一つの道具とのかかわりあいには有機的なものであり、その職人の意思や精神が手を通して道具を動かすものであり、その道具も人間の手の動作や足の運動と機能的に結合する機構や構造を持っているものである。[遠藤 1992: 178]

「職人の意思や精神が手を通して道具を動かす」という記述からは民藝運動の思想が見てとれる。民藝運動とは、大正末期から昭和初期にかけて、思想家の柳宗悦、陶芸家の富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司、イギリス近代陶芸の創始者バーナード・リーチらがおこなった文化運動である。それは、工業化が進み大量生産品が増えていく時代の中、名もなき職人の手から生み出された日常の生活用具「民藝（民衆的工芸）」にこそ、用に則した美が宿っているという考えだった [ジェイブックス編集部編 2016: 14]。日本各地を旅しながらその地で使い続けられてきた民間の日用品に出会い、手仕事の美しさに目覚めた柳は、「民藝」の思想と概念を提唱した。

柳は『手仕事の日本』[1985]で、日本が素晴らしい手仕事の国であることを切々と説き、機械では生まれられない手仕事の良さが具現化された日本の品物を地域ごとに紹介した。この中で柳は、手仕事の優れた点として、民族的な特色が濃く現れてくること、品物が手堅く親切に作られることを挙げている。彼の主張は、以下の文章でより明確になる。

元来我国を「手の国」と呼んでもよいくらいだと思います。国民の手の器用さは誰も気付くところでもあります。手という文字をどんなに沢山用いているかを見てもよく分かります。「上手」とか「下手」という言葉は、直ちに手の技を語ります。(中略) そもそも手が機械と異なる点は、それがいつも直接に心と繋がれていることでもあります。機械には心がありません。これが手仕事に不思議な働きを起こさせる所以だと思います。手はただ動くのではなく、いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに喜びを与えたり、また道徳を守らせたりするのです。それ故手仕事は一面に心の仕事だと申してもよいでありましょう。手より更に神秘的な機械があるでありましょうか。[柳 1985: 13-14]

1926年(大正末年)、柳、富本、河井、濱田は連名で、民藝運動のマニフェストともいわれる「日本民芸美術館設立趣意書」を発表、1934年に柳宗悦を初代会長として、民藝運動の振興を主目的とした日本民藝協会を設立した²⁾。そして民藝運動の開始から10年目となる1936年、倉敷紡績の経営者、大原孫三郎の資金提供によって、民藝品の蒐集や保存、民藝に関する調査研究、民藝思想の普及と展覧会を行うための拠点、日本民藝館(写真1)が東京・駒場に開館した³⁾。



写真1 日本民藝館

出典：日本民藝館ホームページより

第2次世界大戦後になると、民藝運動に賛同して民藝協会会員となった実業家や蒐集家らの尽力により、各地で民藝館が設立される。日本民藝館建設の立役者、大原孫三郎の長男、總一郎は1948年に倉敷民藝館を建設。翌年、鳥取で医業の傍ら民藝運動を支えた吉田璋也は、自身の蒐集品を展示する民藝館を開館させた(1950年に鳥取民藝美術館となる)。その後も、1962年に松本民藝館(1983年松本市に寄贈)、1965年に熊本国際民藝館、富山市民芸館と、次々に民藝館が開館した。1967年には愛媛県西条市に東予民藝館(1977年愛媛民藝館と改称)が開館し、現在まで四国唯一の民藝運動の拠点となっている。1972年には日本万国博覧会の跡地である万博記念公園内に大阪日本民芸館が、1974年には出雲民藝館が、1981年には京都民芸資料館が開館した[日本民藝館監修 2017: 146-150]⁴⁾。

2 世界の手仕事——豊田市民芸館蔵コレクション

「Folk Crafts 世界の手仕事」展が開催された豊田市民芸館は、当初、名古屋民藝協会会長だった本多静雄の尽力で1983年に開館した。日本民藝館の改築に伴って解体された旧大広間と柳宗悦書斎の材木を譲り受けて、第一民芸館が建てられた。ここには本多のこだわりで蒐集した円空仏26体と、柳宗悦の書

斎が常設で展示されている。1985年に開館した第二民芸館は、主に漆器、ガラス製食器などを展示している。第二民芸館から芝生広場を抜けたところに、1990年に往時の田舎家を再現して建てられた第三民芸館がある。ここには囲炉裏を配した日本間があり、箆笥、織機などとともに常設展示されている⁵⁾。

「Folk Crafts 世界の手仕事 館蔵コレクションより」展は当初、東京オリンピック開催に併せ、オリンピックに世界各国の人々が集まるように、館所蔵の世界各国の手仕事を一堂に集めて展示するという発想から企画されたという。広い地球上の遠く離れた地域で、自然発生的に生まれた染織文化の共通性を見直すことがテーマである。会期中には「カード織り」体験、インドネシアの音楽と文化紹介、中国舞踊と文化紹介といった関連企画も行われた。

本展の展示の中心はテキスタイルである。インドネシアのイカット（絳）、パティック（ロウケツ染め）、ロウケツ染めに使用する金属型（チャップ）の他、フィリピンのアバカ（マニラ麻）布、ペルシャ更紗と呼ばれるイランの描き染め（カラムカリ、木版捺染）、コートジボアールの土絵具・泥染め、カメルーンの絞り染めなどが第一、第二民芸館に渡って展示された（写真2、3）。先人の手仕事から

生まれた生活用品や儀礼用具からは、それが作られた自然環境や、人々の暮らしが透けて見える（写真4）。

第二民芸館には手仕事の“味”がよく出た玩具の展示もあった。モンゴルの土人形、ロシアの人形や木製熊、メキシコの手回しメリーゴーランド、ドイツの煙出し人形、フィンランドの土笛、エクアドル、サタサカ族の鳥文様のタベストリーなどは、稚拙にも見える手仕事の中に、柳の語った「民族的な特色が濃く現れて」いる（写真5）。「いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに喜びを与えたり」する手仕事の中には、親が子を想う愛情や、つくり手の喜びが紡がれ、完成したモノに一種のオーラを宿しているようにも感じられる。こうしたモノを、柳らは「感じがある」と言った。そのモノに「生き生きとしたつくり手の命のようなものが表現されている」のである〔ジェイブックス編集部編2016: 118〕。

ところで我々は、時に美術館や博物館の展示に必要な以上の説明を求めたがりはないだろうか。展示物のタイトル、素材、制作年に加えて、学芸員の記したキャプションにすべ



写真2 第一民芸館の展示風景
(2020年9月24日筆者撮影)

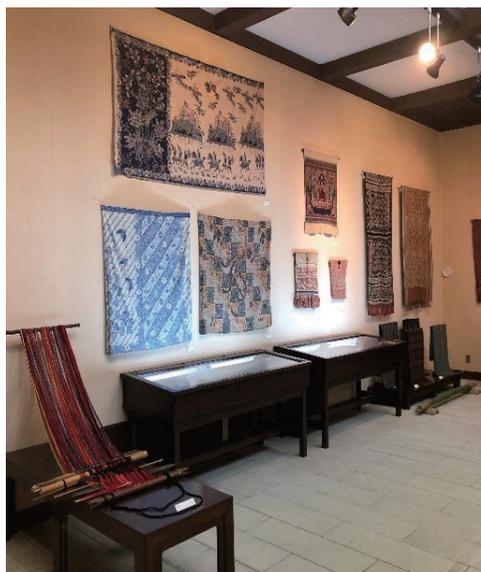


写真3 インドネシアのパティック
(2020年9月24日筆者撮影)

て目を通すと、内容をすべて理解できた気になって安心してはいないだろうか。豊田市民芸館の館蔵コレクション展のキャプションには、資料を蒐集した国、モノの名称（役割）が記されている程度だが、そうした必要最小限の情報が、モノの理解を鑑賞者自身で深める手助けとなっているように思える。異なる国なのに、似た文様が用いられていること、同じようなサイズの布を作っていること、そして何より、そこに同じような人の営みがあり、願いや祈りを込めた文様が施されている。遙か遠くの国の誰かが、家族を思い、織り、編み、描き、縫ったモノに、壮大な共通点を感じることができるよう、余白を残しているかのようだ。

私がかつて訪れた民藝館はどこも、詳説なキャプションを掲示していなかった。こうした簡素なキャプションが、民藝運動に関わった人々の意図だったのかどうかはわからないが、民藝の手仕事の中にある美を感じ取るためには、過剰な解説は必要ないのかもしれない。無駄を省いた簡素な展示方法それ自体

が、民藝運動のコンセプトと一致しているかのようだ。

3 現代に生きる民藝——デザインとのコラボレーション

大正末期の日本で柳らが提唱した民藝運動は、長い時を経て、いまでも継承されている。たとえば、1957年に東京の民藝協会が発行していた『民藝』は、同年10月に日本民藝協会へ移管され、現在まで刊行されているし、民藝運動のコアメンバーである河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銈介、棟方志功らの展覧会は様々な美術館で頻繁に企画され、そのたび会場は盛況である。彼らが提唱した価値観の転換や新たな美の発見といった概念までを理解せずとも、民藝品に見られる「心の仕事」でもある手仕事の温かみは、すべてがインスタントで画一的に生産されたモノに埋もれる現代人にとっては、生活に取り入れたい「人間らしさ」の象徴なのかもしれない。民藝品に感じる温かみ、懐かしさ、素材の質感、手跡の残った“味”や“感じ”を、現代の我々は、どのように継承していくことができるか、新たな可能性について考えてみよう。

ファッション業界が民藝に接近した例として最初に浮かぶのは、セレクトショップ

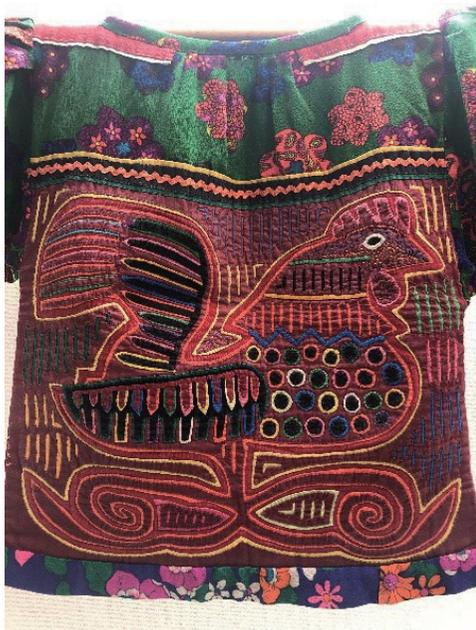


写真4 パナマ、クナ族の上衣（モラ）
（2020年9月24日筆者撮影）



写真5 ロシアの人形
（2020年9月24日筆者撮影）

BEAMSが2003年につくった新レーベル、フェニカ（fennica）である。フェニカは「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマとして、日本を中心とした手仕事と、新旧のデザインを融合させたスタイルの提案をしている。店舗を会場として開催した展覧会には、アフリカ、タイ、日本の民藝を揃えた「世界の民藝」展、アイヌ文化を紹介する「アイヌ・クラフツ 伝統と革新―阿寒湖から」、日本全国から選りすぐった手仕事を扱う鎌倉の「もやい工藝」が選考した器と、フェニカ考案の布製品を紹介する「夏の布とうつわ」展などがある。フェニカは民藝を単なる伝統的な工艺品と扱うのではなく、現在の生活様式に馴染む新たな価値を付加して提案する。たとえば「宮城伝統こけし」（仙台木地製作所）に、それまで使用されてこなかったインディゴのストライプを施した現代版こけし「INDIGO Kokeshi」（写真6）や、「白雪ふきん」（奈良）と琉球紅型のモチーフを組み合わせた台所用布巾は、新たな民藝となり、現代の若い世代にとっては、柳の時代から一廻りして目新しく、手仕事の温かさを伝えている。

2016年からサイト運営を始めたオールドファッション・ストア（Old-Fashioned Store）は、誰もが使う靴下やハンカチという肌に触れるアイテムに特化し、商品だけではなく、包装紙、手提げ袋までを日本で製造

することにこだわる。「誰かが手を動かして製品をつくっている、そんな当たり前のようで忘れられがちなことを思い起こしてもらいたい」というものづくりのコンセプトは、柳らの民藝に対する情熱にも通じる。サイトではハンカチ職人の熟練した技術、実用的なものに宿る機能美についての記述があり、そのアイテムを「新しい民藝の形」と称している。

地域の特徴が希薄になり、モノへの愛着が消えゆく現代、民藝運動が称揚した手仕事に含まれる精神から学ぶことは多い。風土や風習を活かし「民族的な特色」を濃く表した民藝品の蒐集、保存を行い、それを展示する機能としての民藝館の存在は重要だが、民藝品は美術館、博物館の展示ケースに納められるだけではなく、使ってこそ生きるのだ。そもそも、日本民藝館の主たる目的の1つは民藝の普及だったのだから。上述の事例は、民藝に現代の付加価値を添えて普及している例だといえよう。豊田市民芸館では、「Folk Crafts 世界の手仕事」展に合わせ、エクアドル、メキシコ、中国の玩具や、韓国、インド、インドネシアの布製品が販売されていた。各地の民藝館にも、地域の特徴ある民藝品が販売されている。こうしたモノに直に触れ、生活に取り入れることが、日本の手仕事の将来を守る一助となることだろう。



写真6 従来絵付けに使わなかった青を用いた「INDIGO Kokeshi」

出典：BEAMS ホームページより

<注>

- 1) 紹介されている職人の数は2020年10月8日現在。
- 2) 日本民藝協会は現在、青森から沖縄まで32協会があり、各地で手仕事の窯場、工房への見学会、民藝品鑑賞、勉強会などを実施、月刊『民藝』も発行している。
- 3) 収蔵品約1万7千点のうち多くが柳自身の蒐集によるもので、主に江戸後期以降、民衆が使用した陶磁器・染織・木漆工などの工芸品である。その他に民藝運動メンバーの作品も収蔵されている。
- 4) 日本民藝協会は公式HPの「全国の民藝館」の中で、本稿で挙げた民藝館以外にも、「日本民藝館」とゆかりが深い民藝館、美術館を掲載している。たとえば東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（宮城県仙台市）、棟方志功記念館（青森県青森市）、出羽の織座 米澤民藝館（山形県米沢市）、濱田庄司記念益子参考館（栃木県益子町）、国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館（東京都三鷹市）、静岡市立芹沢銈介美術館（静岡県静岡市）、河井寛次郎記念館（京都府京都市）、大原美術館 工芸・東洋館（岡山県倉敷市）などがある。
- 5) この他に茶室、復元された平安時代の古窯、陶芸資料館なども併設されている。（豊田氏民芸館ホームページより）

<参考文献>

- 遠藤元男 1992『職人の現在〔近代・現代編〕』（ヴィジュアル史料 日本職人史第4巻）雄山閣出版。
- 鞍田崇+編集部編 2012『〈民藝〉のレッスン——つたなさの技法』フィルムアート社。
- ジェイブックス編集部編 2016『ニッポン最高の手しごと BEAMS 〈fennica〉』光文社。
- 日本民藝館監修 2017『民藝の日本——柳宗悦と「手仕事の日本」を旅する』筑摩書房。
- 柳宗悦 1985『手仕事の日本』岩波書店。

インターネット資料

- オールドファッション・ストア
<https://old-fashioned.jp/> 2020年10月6日閲覧。
 豊田市民芸館
<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/> 2020年10月5日閲覧。
- ニッポン手仕事図鑑
<https://nippon-teshigoto.jp/> 2020年10月6日閲覧。
- 日本民藝館
<https://www.mingeikan.or.jp/> 2020年10月5日閲覧。
- 日本民藝協会
<https://www.nihon-mingeikyokai.jp/> 2021年10月1日閲覧。
- BEAMS
<https://www.beams.co.jp/blog/fennica/35565/>
 2021年10月4日閲覧。